

昔のお盆

かた
た
渦語り

(三十八)

文・小西 一三
絵・小西 由紀子

自性院の近くで生まれ育った柏崎キミ子さん(85)は、梅花講の一員で、お寺の行事にも積極的に参加されています。そんな柏崎さんにお盆に関するさまざまなことをお聞きしました。

抹茶でも何でも自分の家で作ったもんだよ。

小さい頃はお盆が待ち遠しかった。親戚の人が仏参りに来ると、その人たちが少し小遣いを置いて行ってくれたりしてな。それに私はお寺にお参りに来る人たちを見るのが楽しみだった。みんなさっぱりした晴れ着を着て、家族ごとにぞろぞろ歩いて来る。その、いつもと違った賑やかな雰囲気が好きだった。

お墓のお供え物にしても、今はゴミとして処分する人も多くなっただも、昔は「墓むしり」という人がいて、赤飯やお菓子、果物などのお供え物を集めて回ったもんだよ。それを豚の餌にしたり、赤飯は干して食べられるように加工したりしてな。お供え物を腐らせて捨てるのは、もったいないすべ。あの「墓むしり」はお供え物を大切にすることからも、いいことだと思っ

な。
嫁に来てからは、8月に入ればお盆の準備。今だば店に行けば何でも売っているけども、昔はほとんど自分たちで作ったもんだよ。天気の良いそうな日は抹茶作り。これは桑の葉を採ってきて乾燥させて粉にする。天気が続けば1日2日できてもんだよ。桑の葉が手に入らね時はアカシアの葉を使ったもんだよ。

お盆の間は、仏さまのお膳は毎日作る。お膳には煮付けっこに、ところてんも添える。ところてんの原料のテングサは売って

もいだども、できるだけ買わなくていいように、浜に行つて拾つて干しておいたもんだ。14日は素麺、15日は土産餅を作つてお供えする。お盆の期間中は盆棚にナスとキュウリで馬や牛を作つて供えるも、毎日、ミソハギの枝に水をつけて馬や牛の体を冷してやったもんだよ。

お寺から貰つてきた5枚のこぼは仏はお盆が終わつたからといって祖末にはできねすべ。私だば迎え火、送り火用の鍋の中で燃やして、その灰を20日の灯籠流しの時に一緒に流すようにしている。この専用の鍋も随分使つたなあ。ほら昭和30年つて書いているも、これは買った年。毎年この鍋を使つてるから、もう50年以上も使い続けていることになるなあ。

*こぼは仏 五如来

柏崎キミ子さん



抹茶は下の引き出しに入れておき、使う時には竹のヘラで上の台に直線模様を描くように盛る

手に持った迎え火送り火用のアルマイトの金鍋には購入した日「昭和30年12月12日」の日付けが書かれている